



# 過去からの延長線上に 未来はない…

大島 康弘 (1921~2011年)



## 明和グラビア 株式会社

本社所在地：大阪府東大阪市柏田東町12-28 従業員数：350名 資本金：3億2,000万円  
創業：1953(昭和28)年2月26日  
事業内容：写真製版・印刷・ラミネート・モールドプリント技術に応用したインテリア雑貨・産業資材の製造・販売

## 戦争下における生き立ち

**創**業者である大島康弘は1921(大正10)年、織物業を営んでいた家の子供として埼玉県に生まれた。現在でいう中学校までを埼玉で過ごした康弘は、卒業と同時に父親の友人の書生となって東京府立工芸学校(現・東京都立工芸高等学校)に入学。数学や物理を非常に得意としており、最難関だった精密機械科で学業に励んだ。しかし、時代は折しも日中戦争の最中にあっただけから、1939(昭和14)年9月康弘の卒業は半年繰り上げとなり、そのまま陸軍科学研究所に所属することとなる。

## 技術者としての第一歩

**康**弘が所属した陸軍科学研究所では、当時極秘に中国通貨『法幣』の偽造工作、つまり偽札作りが行われていた。後に康弘が書いた回顧録には「自室以外絶対に入れない、隣は何をしているのかも分からない(中略)3ヶ月目に初めて完成品を見せられ自分が何を作っていたか分かった」という記述が残っている。そんな現場での康弘の仕事は、大型輪転機の組み立てと試運転に始まり、用紙やインキの研究、輪転機の設計・改良



陸軍科学研究所時代の康弘(写真中央)

など多岐にわたる過酷なものだった。しかし一方で、この時期に最先端の機器や技術に触れてきた経験があったことで、終戦時には一人前の印刷技術者として身を立てることができた。

## 経営者としての第一歩

**終**戦後の1946(昭和21)年、康弘は旧軍時代の上官とともに、名古屋で明和印刷(株)の創業に参加した。当時、明和印刷(株)では新聞の折り込み広告や宝クジ、鉄道の切符、マンガの単行本などの幅広い分野の印刷を請け負っており、営業マンとして入社した康弘は東京・大阪へ飛び回る日々だった。そのような忙しい日々を過ごす中で、妻・節子と結婚、それを機に営業から特殊印刷部門へ異動することとなった。

特殊印刷部門の部門長となった康弘は、珉瑯鉄器や電話のダイヤル向けの印刷技術等を研究・開発し、本格的な生産体制を構築しようとしていた。しかし、その当時の明和印刷(株)には資金的な余裕がなかったため、外部から大幅な出資を受ける形で「特殊珉瑯(株)」が設立された。康弘は自分が創立メンバーでもある「明和印刷」に強い愛着を感じており、新会社の名前にも「明和」の名を



明和印刷(株)入社当時。写真左が康弘。

付けることを希望していたが出資会社の力関係により叶わなかった。この出来事について、康弘は後に「資本構成というものの力を初めて認識したのだった。(中略) 会社経営に非常に勉強になった私の第一歩である」と記している。

## アメリカから来た 「ビニール」との出会い

**特** 殊珙瑯(株)の経営が軌道に乗った1949(昭和24)年頃、康弘は親会社である明和印刷(株)社長・長苗三郎から社長室へ来るよう呼び出された。康弘が社長室に入ると、東京出張から帰ったばかりの長苗ははがき大のセロハンのようなものを取り出し、「他社がこれから、これに印刷を行う事業を始めるそうだ。うちではできないかね」と尋ねた。それはアメリカから入手されたビニール(ビニール：当時の表記)であった。当時、「これからは木材や金属に代わってプラスチックの時代になる」と言われ始めた時期で、康弘は次世代の新素材を研究できる喜びを胸に長苗の依頼を引き受け、すぐさま工業試験所や各研究機関を回って情報と知識を集めるとともに、プラスチック分野の専門家を自社に招き入れ、研究・開発を加速させていった。

## 独立の決意と 明和グラビヤ印刷(株)の創業

**ビ** ニール印刷という新境地開拓を進める特殊珙瑯(株)と相反するように、親会社・明和印刷(株)の業績は悪化の一途を辿り、ついに1951(昭和26)年末に他社との競争に敗れ倒産するに至った。明和印刷(株)はその後、社長の交代・他社による買収・大幅な人員整理・社名の変更などが行われ、以前のような雰囲気や環境が失われたが、それでも康弘はビニール印刷事業を成功させたいという一心で、変わり果てた明和印刷とその影響下にあった特殊珙瑯に残留し続けていた。しかし、1952(昭和27)年の秋、長苗前社長をはじめ、ともにビニール印刷事業を盛り立ててきた同僚や部下が次々と会社を後にし、康弘も現状でのビニール事業継続を断念。自分の力で運命を切り開いていく覚悟を持って独立を決意したのであった。

しかし、独立・創業にあたって、康弘には資金がなかった。あちこちへ融資を依頼するも相手にされず途方に暮れるなか、見かねた妻・節子が差し出したへそくり50万円(現在の価値で400万円程)が創立時の資本金となった。康弘はその資金

をもとに名古屋で30坪ほどの町工場を購入、さらに明和印刷時代の部下10名ほども駆けつけ、1953(昭和28)年2月「明和グラビヤ印刷株式会社」が設立された。康弘は後年、この10名ほどの部下たちに対し「当時、果たして給料を支払い得るや否やも判然とせぬにもかかわらず、(中略)黙って従ってくれたことに対しては、今もって胸が熱くなる次第である」と記し、最大の謝辞を送っている。

しかし、創業を果たしたまでは良かったものの、「ビニール印刷専門業者」は時期尚早だったためか受注は少なかった。そのため、キャラメルやチョコの包み紙などを印刷する包装紙印刷を併業し、この時期をしのいだ。

## 創業以来最大のピンチと 転機となる「風呂敷ブーム」

**旗** 揚げから半年ほどが経過した1953(昭和28)年の秋、康弘の工場は電気配電のショートによる火事に見舞われた。可燃性のインキが大量に置かれた工場の中で、炎は瞬く間に燃え広がった。康弘と社員たちの懸命の消火活動により建物や機械への被害は最小限に食い止められたものの、当月の売り上げは創業以来最低となり、康弘自身「私が最もピンチに立たされた時期であった」と回顧している。

火災事故以降しばらく薄氷の上を歩くような危機的経営を余儀なくされた。転機となったのは、大阪のゴム業者が生産し、康弘がプリントを請け負っていたビニール風呂敷が大ヒットしたことだった。当時、大阪にはビニールを印刷できる工場がなく、名古屋にあった康弘の工場に印刷依頼が殺到したのであった。毎朝、オート三輪に満載された原反が入荷され、夜中の1時まで印刷に追われる生活であったが、康弘は寝る間を惜しんで働き続けた。この「風呂敷ブーム」は衰えること



大ヒットとなったビニール風呂敷に続き、ビニールテーブルブルクロス。

なく続き、1955(昭和30)年、康弘は大阪に進出することとなる。この頃、ビニールフィルムは量産化が可能になり、海外輸出の引合が激増していた。康弘もタイのバンコク向けに輸出事業をスタートしたのがこの時期だった。

その後、明和グラビヤ印刷(株)は伊勢湾台風・第2室戸台風による被害やバブル崩壊といった時代の荒波に揉まれながらも、国内外事業とも好調に業績を伸ばしていった。特に海外事業においては、1967(昭和42)年に現地法人「メイワ・フィリピン」を設立、1972(昭和47)年に現地法人「メイワ・インドネシア」を設立するなど、同社の成長に大きく寄与してきた。

妻・節子のへそくりと従業員10人で始まった町工場は、創業から60年余りで3つの海外拠点と売上120億円を誇る塩ビ製テーブルクロスの日本トップシェア企業となったのである。

## 社員・妻と歩んだ経営者人生

1955(昭和30)年頃、風呂敷ブームに沸く明和グラビヤ印刷(株)では社員の数も増え、康弘は労務問題に取り組むようになっていた。会社全体の給与体系や結婚した社員の処遇、改善提案運動の設定など、康弘は社員と向き合いながら一つずつ制度を組み上げていった。また、真に社員たちと寄り添いながら会社を盛り立てていきたいと考えていた康弘は、制度整備に限らず、社員の本音を汲み取ることに苦心し、様々な施策を行った。その中でも、康弘が「大成功だった」と振り返るのは「便所の中の投書黒板」であった。

当時、苦情処理用に投書箱の制度はあったが、会社に対し正面から苦情を投書してくる社員はほとんどいなかった。そこで康弘は、工場内の各便所に落書き用の黒板を設置し、誰も見ていない所で思ったことをなんでも書かせた。すると、社員たちからは毎日投書があがってくるようになり、康弘もこれらの投書に対してすぐに返事を書き、毎日昼休みの食堂で掲示した。経営者が社員の本音に触れることの難しさと重要性を理解していたからこそ、康弘は徹底して社員と向き合うことを大切にしていた。

また、康弘は妻・節子への感謝の気持ちを生涯忘れなかった。創業時の苦労をともにし、経営が軌道に乗ってからも経理・購買・総務から残業している社員の食事の世話など、早朝から深夜まで激務をこなしてきた妻の働きなくして会社の存続はなかったと、後年康弘は書き残している。節子は1965(昭和40)年に業務の第一線から退くが、常

に康弘への客観的なアドバイスを欠かさず、また社内報において「(仕事のことで相談があって)男の方ではと云う様なことがありましたら、どうか私を思い出して、少しでもお役に立てば誠に幸せに存じています」と寄せるなど、内と外から二人で会社を支える覚悟を持ち続けた。

## 康弘が経営者として描いた未来へ

康弘は1975(昭和50)年の紫綬褒章、1991(平成3)年の勲四等瑞宝章を受章する。技術者としての数々の発明と経営者としての会社の発展、いずれもが評価されての受賞であった。民間技術者として最高の栄誉を得た康弘は、創業から現在に至るまでを振り返り、妻・節子とともに盛大に喜んだ。

1993(平成5)年12月、度重なる病に侵された康弘は、社長を息子・規弘氏(現・代表取締役社長)に譲り、同社会長に就任した。しかし、体力的な不安をよそに、康弘のものづくりへの闘志は衰えることなく、翌年同社は世界初の「ビニール水性グラビア印刷技術」を完成させた。これは、それまでの印刷技術の安全性・環境配慮・生産効率のすべてを向上させた革新的な発明であり、康弘が不退転の覚悟で取り組んだ事業だった。康弘は明和グラビア50周年記念誌に、以下の言葉を寄せている。「過去からの延長線上に未来はない。(中略)常に未来を開拓することにより、社員の活性化が生まれ、企業は成長し、繁栄が続いていくのではなからうか」。

2011(平成23)年、康弘は1,000人近い参列者に見送られ、この世を去った。70年以上前に陸軍に配属されて以来、常に技術革新によって自らの組織の未来を開拓すべく尽くしてきた男の魂は、今日も明和グラビア(株)の中で次なる未来を切り拓くべく燃え続けている。



紫綬褒章受章祝賀会において現社長・大島規弘氏より花束を受け取る康弘と妻・節子。